高校留学生の日本語学習の到達度に関する縦断的研究

村野良子
（国際基督教大学）

1. はじめに

高校留学生[1] を担当する高校の先生からよく聞かれる質問は留学生の日本語の到達目標をどこに設定したらよいかということである。実際全く日本語を理解しない留学生が4月に登校したときに、一年後の言語能力の伸びを予測することはむずかしい。経験的に言われていることは、夏休みを境に留学生の日本語能力が急速に伸びるということ、その結果母国で日本語を学習してきた生徒は日本語能力試験の3級、全く日本語を学んだことのない生徒の場合は4級を受験する程度の言語能力を身に付けるのではないかということである。さらに最近1、2年は母国での日本語学習のレベルが上がったこと、ホスト校の指導が効をそうして到達レベルが上がってきているということも知られている。

本研究の目的は高校留学生が約11ヶ月の滞在期間中に日本語を使ってどのくらいどんなことができるようになるのかということを、縦断的にみることである。留学生の日本語能力をなんらかの基準に照らして記述することによって、留学生が明確な到達目標をもち、それにそった現実的な学習計画をたてることができるのみならず、日本語のの能力の進捗状況について必要以上に楽観的になったり、悲観的になったりすることなく自分自身の学習を客観視することができるようになると考えられる。

ここでは次の3つの課題について考察する。

1. 留学生の日本語能力は一年間の間にどの程度のレベルに達するのか。
2. 日本語能力の伸びにどのような特徴がみられるか。
3. 1、2は未習者と既習者ではどのような違いがあるか。

2. 調査の計画

2.1 調査の方法

日本語能力を測定するために来日直後、5カ月後、および11カ月後の3回日本語テストを実施した。日本語能力の伸びをみるために、テスト1と2、2と3に一部同一問題を使用した。

第1回目（テスト1）は来日直後に実施し、所要時間は説明と回収を含めて1時間半から2時間である。聴解問題は留学生の日本語聴き取り能力がそれほど高くないことが予想されたので、筆者が作成したものを使用した。これは数の聞き取り、家族構

成、生活行動を中心とした内容の録音を聞き取るもので、日本語を５０時間から１００時間程度学習したレベルで録音の速度は日本人が自然だと感じる速さであるが、４級より低いレベルであることから仮に５級とよぶ。筆記試験は、日本語能力試験４級と３級の過去に出題された問題の、漢字の読み書き、読解と文法から選んで使用した[2)]。さらに課題による作文形式の書き方テストを実施した。会話能力に関しては、調査者の参加調査と個人面接によって判定した。

第２回目（テスト２）は、８月上旬に実施した。日本語能力テストの形式は、第１回目と同じである。日本語能力の伸びをみるために、一部テスト１と同じ問題をしようした。会話能力については調査者が参加調査によって判定した。

第３回目（テスト３）は１０か月後の１２月から１月にかけて実施した。会話能力については、調査者自身の参加調査と１２名の面接調査によって判定した。

テスト毎の問題の種類とレベル、問題数は以下の通りである。

表１　テスト毎の問題の種類とレベル

	聴解		漢字		読解		文法	
	レベル	問題数	レベル	問題数	レベル	問題数	レベル	問題数
テスト１	5	50	4	20	4	12		
テスト２	5 4 3	8 7 5	4 3	9 7	4 3	1 1	4 3	5 3
テスト３	3 2 1	6 5 5	3 2	7 8	3 2	8 1	3 2	3 4

2.2　被験者

第１回目の調査時点でこの調査の対象となった留学生は９３名であったが、第２回目のテストを受けることができなかった１名は集計から除いた。その結果テスト１とテスト２については未習者３８名、既習者５４名、計９２名を集計対象とした。テスト３については、様々な理由によって１２月中に帰国した被験者がいたために、聴解テストを実施できたのは８８名、筆記テストを実施できたのが６９名、作文テストを受けた被験者が８６名である。９２名の出身地域別内訳はアメリカ合衆国　12名、オーストラリア/ニュージーランド　４８名、南アメリカ　１０名、アジア　１１名、ヨーロッパ　１１名（フランス語圏のカナダ１名）である。このうち６か月以上の日本語学習の経験のある生徒を既習者グループに分類し、６か月未満（４名）と学習歴ゼロの生徒を未習者とする[3)]。

2.3　調査の問題点

調査の計画に関しては、２つの大きな問題点があることを指摘しておかなければならない。一つは日本語能力を測定する方法としてのテストの妥当性である。公的なテストである日本語能力試験を使用することで問題の妥当性と信頼性は確保されたとしても、テストにさくことのできる時間に制約があったため、問題の数を極度に減らす必要があった。しかもこの研究の目的が日本語能力の総合的な測定にあるために、色々な技能を測定する必要があり、ひとつの技能の測定を十分に行うことができない。問題数の少ないことはテストとしての信頼性に関る問題である。さらに日本語能力の十段滴縦断的研究においては同一問題によって、能力の伸びをみることが一般的な方法である。今回の調査においては、被験者の能力の幅が大きく、ゼロから５、６年の学習歴の被験者までを対象としたために同一問題を採用することはできなかった。解決策として一部の問題を同じにして伸びをみたが、決して十分とはいえない。

もう一つの問題点は被験者の問題である。今回の調査で学習歴による違いを考察対象の一つとしているが、既習者にはオーストラリアとニュージーランドの出身者が圧倒的に多く出身地域に偏りがある。出身地域による学習への取組方の違い、あるいは日本語にたいする態度の違いが日本語学習に影響を与えるとすれば、この出身地域による偏りは調査結果に関ってくることが考えられる。

３．調査結果の分析

3.1 留学生の日本語能力の縦断的考察

表２は　テスト１、２、３における成績を技能別、レベル別に分類し各項目における得点を被験者全員、未習者、既習者についてみたものである。Ｔ１はテスト１、Ｌは聴解問題、Ｋは漢字、Ｇは文法問題、Ｒは読解問題、Ｗは課題作文の略である。Ｋ４は漢字問題の４級レベルの意味である。Ｗ１、Ｗ２、Ｗ３はそれぞれテスト１、２、３の課題作文をさす。表３はテスト１、２、３の問題についてスキル別に平均値、標準偏差、正当率を、被験者全員、未習者、既習者についてみたものである。以下３回のテストの結果を基に、来日直後、５か月後、および１０か月後の日本語能力をみていく。

表2

テスト1，2，3における日本語能力テストの成績

テスト種目	平均点	T1L5	T1K4	T1R4	T2L4	T2L3	T2K4	T2K3	T2R4	T2R3	T2G4	T2G3	T3L3	T3ZL	T3IL	T3K3	T3K2	T3G2	T3R3	T3R2	W1	W2	W3
全average	1.69	17.70	6.51	4.39	6.16	3.73	7.59	3.39	0.90	0.97	3.86	1.25	5.33	4.07	3.95	5.52	5.26	2.65	5.57	0.46	1.49	4.28	6.61
max	6	44	20	12	7	8	9	7	1	1	5	3	6	5	5	7	8	4	8	1	5	7	9
min	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	2	1	0	0	0	0	2	2
mode	0	19	0	0	7	5	9	2	1	1	4	0	6	4	5	7	8	3	7	0	0	4	7
median	1	18	4	2	7	4	8	3	1	1	4	1	6	4	4	6	5	3	6	0	2	4	6.75
SD	1.75	9.78	6.97	4.78	1.40	1.30	1.89	2.11	0.30	0.18	1.08	1.07	0.90	0.82	1.15	1.48	2.03	1.11	2.32	0.50	1.33	1.13	1.24
count	93	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	88	88	88	69	69	69	69	69	92	92	86
男average	0.03	12.70	2.00	1.32	5.95	3.50	7.21	2.74	0.84	0.95	3.71	1.08	5.16	4.05	3.79	5.55	5.29	2.61	5.26	0.42	0.47	3.97	6.41
max	0.5	31	15	12	7	8	9	7	1	1	5	3	6	5	5	7	8	4	8	1	4	6	9
min	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	4	3	2	0	0	0	0	0	0	2	4.5
mode	0	2	0	0	7	4	9	2	1	1	4	0	6	4	5	7	5	3	6	0	0	4	7
median	0	12	0	0	7	4	7.5	2	1	1	4	1	6	4	4	5	5	3	6	0	0	4	7
SD	0.12	8.57	4.09	3.29	1.54	1.52	2.03	1.86	0.36	0.22	1.17	1.01	1.01	0.79	1.30	1.32	2.00	0.97	2.20	0.49	0.88	0.93	1.53
count	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	31	31	31	31	31	38	38	38
女average	2.84	21.20	9.69	6.56	6.31	3.89	7.85	3.84	0.94	0.98	3.96	1.36	5.46	4.08	4.08	5.50	5.24	2.68	5.82	0.50	2.20	4.49	6.77
max	6	44	20	12	7	5	9	7	1	1	5	3	6	5	5	7	8	4	8	1	5	7	9
min	0.7	3	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	3	0	1	2	2	0	0	0	0	2	5
mode	3	19	0	12	7	5	9	6	1	1	4	0	6	4	5	7	8	4	7	0	2	4	6
median	3	20	10	7	7	4	9	5	1	1	4	1	6	4	4	6	5	3	7	0.5	2	4	6.5
SD	1.40	9.01	6.82	4.46	1.28	1.09	1.73	2.16	0.23	0.13	1.01	1.10	0.78	0.84	1.00	1.60	2.06	1.22	2.38	0.50	1.11	1.21	0.93
count	55	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	50	50	50	38	38	38	38	38	54	54	48

表3

テスト1，2，3の結合

テスト1，2，3における日本語能力

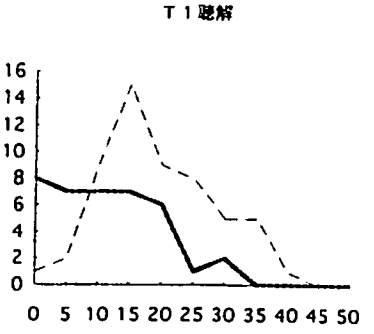
レベル	問題数	項目	テスト1 全員	テスト1 男性	テスト1 女性	テスト2 全員	テスト2 男性	テスト2 女性	テスト3 全員	テスト3 男性	テスト3 女性
5級	50	平均	17.70	12.70	21.20						
		正答率	0.35	0.25	0.42						
		SD	9.78	8.57	9.01						
4級	20	平均	6.51	2.00	9.69						
		正答率	0.33	0.10	0.48						
		SD	6.97	4.09	6.82						
4級	12	平均	4.39	1.32	6.56						
		正答率	0.37	0.11	0.55						
		SD	4.78	3.29	4.46						
5級	6	平均				7.77	7.71	7.82			
		正答率				0.97	0.96	0.98			
		SD				0.64	0.68	0.61			
4級	7	平均				6.16	5.94	6.31			
		正答率				0.88	0.85	0.90			
		SD				1.40	1.54	1.28			
4級	9	平均				7.59	7.21	7.85			
		正答率				0.84	0.80	0.87			
		SD				1.89	2.03	1.73			
4級	1	平均				0.90	0.84	0.94			
		正答率				0.90	0.84	0.94			
		SD				0.30	0.36	0.23			
4文法	5	平均				3.86	3.71	3.96			
		正答率				0.77	0.74	0.79			
		SD				1.08	1.17	1.01			
3聴解	5	平均				3.73	3.50	3.89			
		正答率				0.75	0.70	0.78			
		SD				1.30	1.52	1.09			
3漢字	7	平均				3.39	2.74	3.84			
		正答率				0.48	0.39	0.55			
		SD				2.11	1.86	2.16			
3聴解	1	平均				0.97	0.95	0.98			
		正答率				0.97	0.95	0.98			
		SD				0.18	0.22	0.13			
3文法	3	平均				1.25	1.08	1.36			
		正答率				0.42	0.36	0.45			
		SD				1.07	1.01	1.10			
3聴解	6	平均							5.33	5.16	5.46
		正答率							0.89	0.86	0.91
		SD							0.90	1.01	0.78
3漢字	7	平均							5.52	5.55	5.50
		正答率							0.79	0.79	0.79
		SD							1.48	1.32	1.60
3聴解	6	平均							5.57	5.26	5.82
		正答率							0.70	0.66	0.73
		SD							2.32	2.20	2.38
3文法	3	平均							2.17	2.00	2.32
		正答率							0.72	0.67	0.77
		SD							0.98	0.98	0.95
2聴解	5	平均							4.07	4.05	4.08
		正答率							0.81	0.81	0.82
		SD							0.82	0.79	0.84
2漢字	8	平均							5.26	5.29	5.24
		正答率							0.66	0.66	0.66
		SD							2.03	2.00	2.06
2聴解	1	平均							0.46	0.42	0.50
		正答率							0.46	0.42	0.50
		SD							0.50	0.49	0.50
3文法	4	平均							2.65	2.61	2.68
		正答率							0.66	0.65	0.67
		SD							1.11	0.97	1.22
1聴解	5	平均							3.95	3.79	4.08
		正答率							0.79	0.76	0.82
		SD							1.15	1.30	1.00

3.1.1　来日直後の日本語能力

1.　聴解（図１）

テスト１の聴解テスト５０問の結果をみると、既習者グループでは、最高点が４４点、最低点は３点であるが、多くは１９点前後である。これにたいして未習者の場合は、最高点３１点、最低点０、平均点は１２.７０で、２点が最も多い得点である。図１は聴解テストの得点分布である。点線は既習者、太線は未習者である。

図１



この聴解テスト実施前に、推測してもよいと指示した。母国で全く日本語を学習したことのない生徒も、２、３日の滞在で耳にした挨拶ことば程度は聞き取ることができる。しかし母国で日本語を学習した経験があるといっても、自然な速さの、いろいろなヴァリエーションのある生の日本語を聞き取ることは、過去に滞在経験のない留学生にとっては困難なことであることが、テストの結果から言えそうである。

2.　漢字（図２）

出題した漢字はすべて４級の範囲内のごく初歩的な漢字に限られているが、既習者では２０問中平均正答数が９.６問である。既習者の中で漢字はまったく学習したことがない生徒が５５名中９名いる。得点分布の図を見ると、分布はゼロから満点まで同じ程度に広がっており、既習者の中でも漢字の学習に関しては学習環境によって習得程度が異なることがわかる。未習者については平均正答率は２問で、ほとんどの生徒はゼロである。

図２

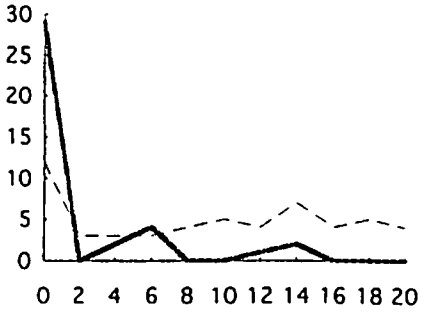
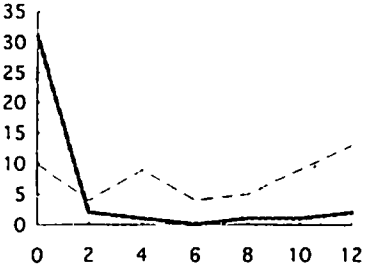


図３



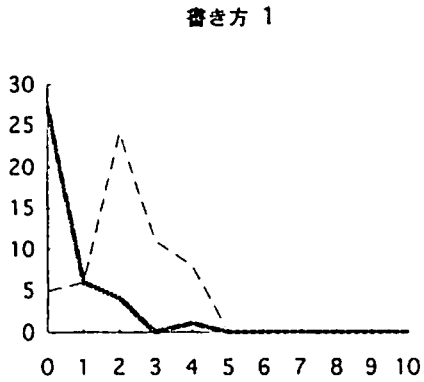
3．読解（図３）

読解問題は会話や叙述文による短いテキストを読んで、正しい絵や文を選ぶ形式である。テキストは日本語初級のごく初期の学習項目である存在文、生活行動の動詞文を中心にしたもので、すべて平仮名表記となっており、漢字の知識の有無による影響が少ないように配慮されている。既習者は１２問中正解は平均６．５６問、最頻値は１２である。未習者の平均は１．３２問、最頻値はゼロである。得点分布グラフの形状は漢字のそれときわめて似ており、読みの習得と漢字の習得に関しては母国の言語学習において同じような学習環境があったのではないかと思われる。

4．書き方（図４）

書き方は、自分について、名前、住んでいた町、家族、学校など日常的な話題をまじえて書くという課題である。原則として漢字とかなを使い、書けない部分はローマ字でもよいとした。書き方はテスト１、２、３を通して筆者の作成した日本語能力評価基準によって１～１０の段階の評価を行った。自分の名前や２、３の日本語の言葉が書けていれば段階として「１」とする。ローマ字のみの表記はゼロとした。得点分布をグラフでみると、未習者の場合は７割以上がゼロで、ほとんどが白紙であった。一方既習者では暗記した文をいくつか書ける程度であれば、「２」、課題に則していて、ある程度まとまった内容であるが、暗記した文を羅列しただけのものは「３」とした。学習歴２～３年の生徒のほとんどがこの段階である。学習歴３～４年の生徒の中で日本語力の高い生徒と学習歴５年以上の生徒の多くがこれより高い「４」のレベルの文章を書いている。「４」の段階では接続表現を少し使った長い文を含むまとまりのあるパラグラフになっていて、外国人の日本語にふなれな日本人でもなんとか理解できる文章であることを基準とした。５０字程度の漢字が使用されていることも目安である。「５」はパターン化した暗記した文ではなく、自分で文を作っているかどうかという点を重視した。１００字程度の漢字が使用され、名詞修飾文や複雑な形の文ができていること、課題に則していることを評価の基準とした。このレベルに入る被験者は３人で、いずれの生徒も母国で５年間日本語を勉強しており、内１名は日本に短期留学した経験がある。

図４



5. 話し方

この時点では未習者のほとんどが習ったばかりの挨拶言葉を、1、2語言える程度である。既習者では名前、区になどについて単語レベルかもっとも簡単な暗記した文で表現できるが、聴き取り能力が低いためにコミュニケーションはほとんど成立しない。

3.1.2 来日5か月後の日本語能力

1. 聴き方（図5、6）

テスト1と同じ問題についての正答率を見ると、ほぼ100％であり、サバイバル程度の聞き取りは完全にできるようになっていることがわかる。日本語能力試験4級の聴解問題の正答率は未習者平均85％、既習者平均90％であるが、3級の正答率は未習者35.0％、既習者38.4％で4級に比べかなり低くなる。得点の分布をみると4級でも3級でも既習者の高得点者が未習者を上回るが、3級の場合にその傾向がより顕著である。このことからおよそ5か月後の留学生の聴解能力は4級レベルはすでに越えているが、3級には届いていないことがわかる（日本語能力試験では2、3、4級においては6割がおよその合格ラインと公表されている）。さらに未習者の高得点者は4級のレベルでは既習者に追い付いているが、すこしレベルの高い問題では既習者にまだ余裕があるようである。

図5

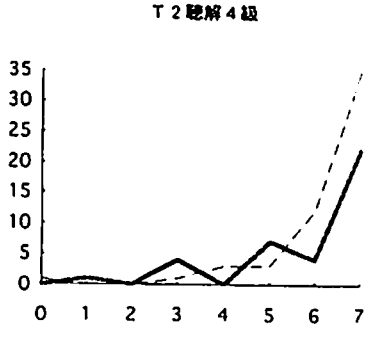
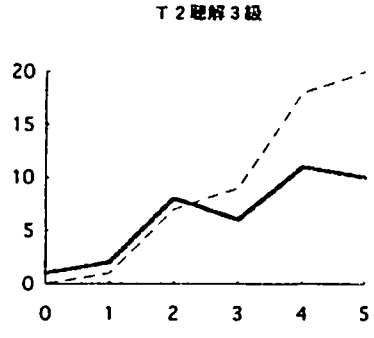


図6



2. 漢字（図7、8）

テスト1における4級漢字の正答率は未習者10％、既習者が48％であったが、テスト2では両者とも80％を越えており、4級レベルの漢字は習得されていることがわかる。3級の漢字についてみると、未習者で39％、既習者で55％である。得点分布図をみると既習者のピークが5、6点のところにあるのに対して、未習者の場合は2点がピークであり、全体に分布が左に寄っている。このことから漢字の学習に対しては、ごく基礎的な100字程度の4級の漢字の習得はかなり容易であるのに対

して、３級の漢字３００字を習得することは容易ではないことが推測できる。

図７

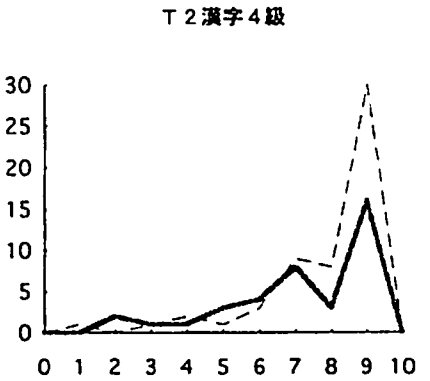
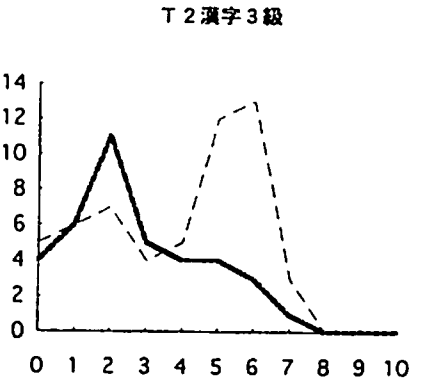


図８



３．読解

読解問題の問題数が少ないので（４級、３級とも１問ずつ）差をみることはむずかしい。参考程度にとどまるが、正答率は４級では未習者８４％、既習者９４％、３級の問題では、それぞれ９５％、９８％で、むしろ３級のほうが高くなっている。問題はどちらもある程度の長さをもつテキストを読んで、適当な絵を選ぶという形式である。「上」という漢字以外は平仮名で書かれたテキストであり、内容はごく日常的なものである。この程度のテキストを読み取るという能力は未習、既習を問わず５か月の間に確実に習得されていると結論してもよいのではないだろうか。

４．文法（図９、１０）

テスト１では内容を把握する問題が中心であり、言語使用の正確さを問う設問はなかったため、テスト１と比較することはできない。テスト２では４級と３級の文法問題をテストした。４級問題の正答率は未習者、既習者それぞれ７４％、７９％であるのに対して、３級では３６％、４５％と低くなる。留学生が通常の授業の他に日本語の指導を受けている場合でなければ、正確さの習得は後回しになってしまうのかもしれない。

図９

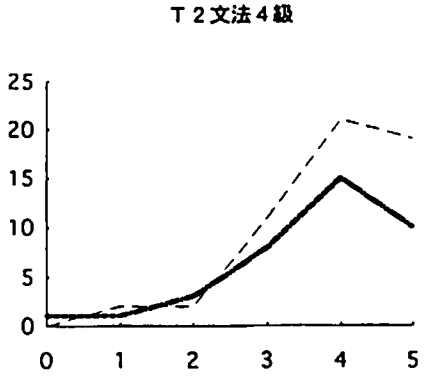
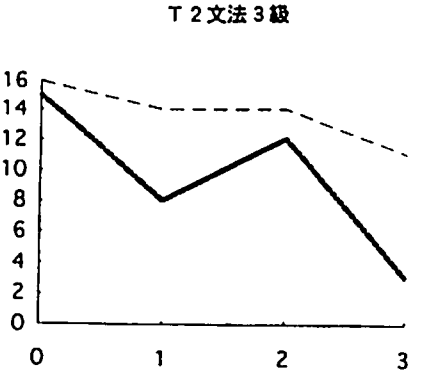


図１０



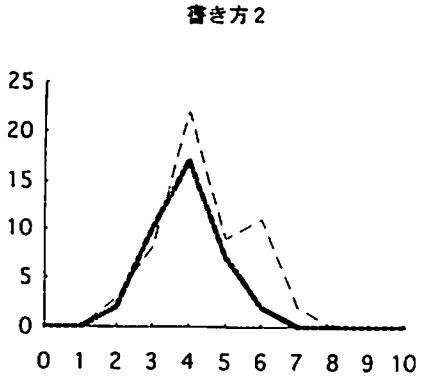
5．話し方

筆者が参加したディスカッションセッション（７月中旬、８月上旬、９月上旬）においては、日本での５か月の反省と感想というテーマですべての話し合いが行われた。この話し合いは原則的に、ほとんど大部分、日本語のみで行われた。数人の生徒を除いて、全員が日本語で現状、生活体験、問題、予定などについて自分の経験を語り意見をのべることができるようになっていた。９２名全員について個別にインタビューをしていないので、2/3の留学生は、評価基準に照らすと、初級の「４」から中級の「５」ないし「６」の段階に入るように思う。残り1/3の留学生では日本語には反応せず受け答えはすべて英語で行う生徒、日本語での問いに対して答えはすべて英語で行う生徒、単語レベルの返答しかしない生徒、英語がつねに混ざる。英語で返答する生徒には英語が母語ではない留学生も含まれる。ACTFLの評価基準に従えば、初級の上から中級の下から中の範囲に学習者が広がっているといえる。

6．書き方（図１１）

テスト２の課題作文は日本人の知人に手紙で近況報告をするというもので、日常生活について報告するとともに、日本のやり方についての意見や感想をあわせて書くというものである。テスト実施時には、できるだけいろいろなタイプの文を使い知っている漢字はできるだけ使って書くように指示した。評価は手紙の形式に近い形であるかどうか、接続表現がある程度使えているか、漢字の使用はどうか、といった視点から行った。相手が友人か、目上の人かによって文体が変えることまで要求することはこの段階では無理かも知れないが、生徒が文体の使い分けを意識しているかどうかも評価の基準の一つである。他のテストと同様に辞書を使わずにその場で書くように指示したが、所要時間には個人差があるが１０分から２０分である。テスト１と比べると、未習者も既習者も最頻値は「４」で、ほとんどの生徒が基礎漢字５０程度（基準は日本語能力試験の出題基準による）のいくつかを使って日常的な内容についてまとまりのある文章が書けるようになっている。

図１１



3.1.3　滞在１１か月後の留学生の日本語能力

１．聴解（図１２、１３、１４）

聴解テストでは日本語能力試験３級、２級、および１級の問題についてテストを行った。正答率は未習者、既習者それぞれ３級の問題では８６％、９１％、２級では８１％、８２％、そして１級では７６％、８２％である。未習者と既習者ともに７５％以上の高い正答率を示している。また得点分布グラフによると既習者には未習者より若干高得点者が多いことを除けば両者に差はほとんどみられない。

図１２　T3聴解３級

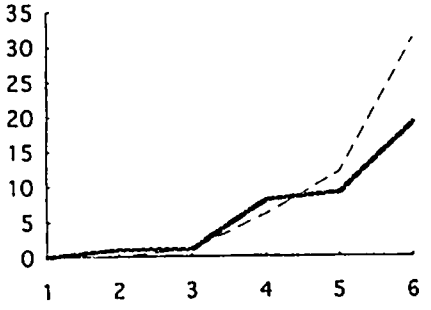


図１３　Ｔ３聴解２級

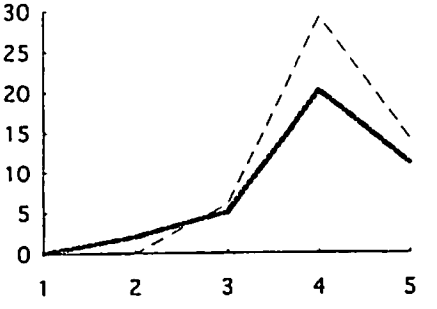
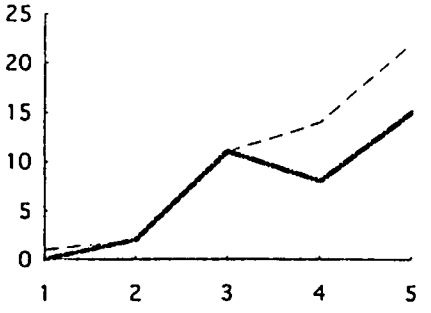


図１４　Ｔ３聴解１級



２．漢字（図１５、１６）

能力試験の出題基準では３級は漢字３００字程度、２級は１０００字程度となっている。テスト３の正答率をみると漢字３級、２級は既習者、未習者ともに平均がそれぞれ７９％と６６％で既習者と未習者間で差はない。得点分布図においてもばらつきはあるが同様の分布状況であると考えられる。

図１５

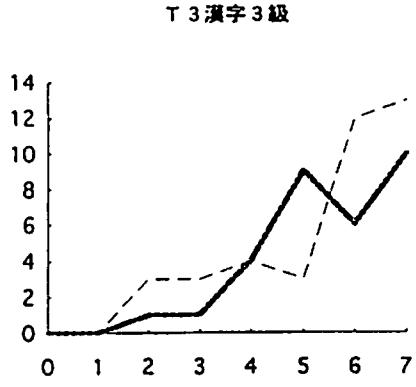
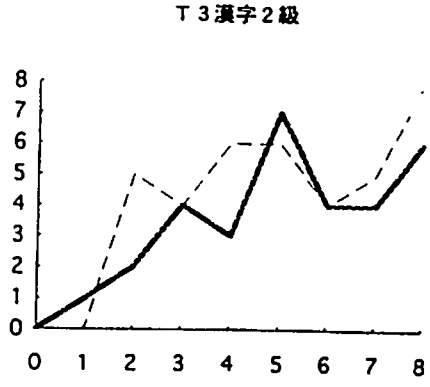


図１６



３．文法　（図１７）

テスト３では３級の問題が３題、２級の問題が４題出題された。正答率は未習者、既習者が３級の問題ではそれぞれ６７％、７７％、２級の問題では６５％、６７％である。問題数が少ないので断定することはできないが、平均的には２級の合格ラインに達していそうである。

４．読解（図１８）

読解テストは３級の問題は手紙文を読んで設問に答える形式である。正答率は未習者が６７％、既習者が７７％である。２級の読解問題は短いパッセージについて１つの設問があるものである。正答率は未習者、既習者それぞれ４２％、５０％であるが、問題数が少ないので参考程度にしかならない。

図１７

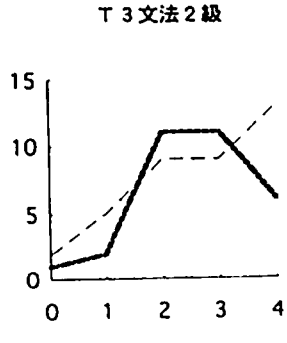
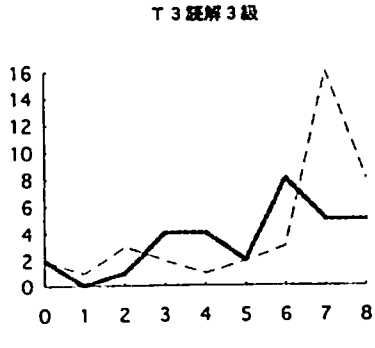


図１８



５．話し方

調査者の観察による判定と地方の留学生については各支部の支援者による判定を集計すると、多くの留学生は判定基準６のレベル、ＡＣＴＦＬの基準による中級の中の

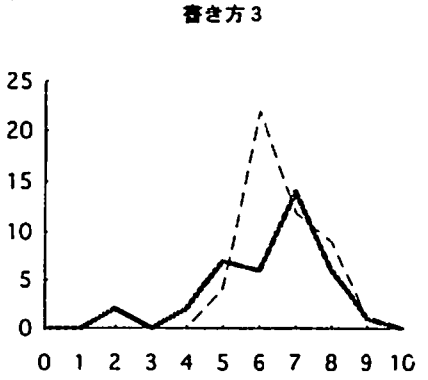
レベル、つまり日常的な会話に参加して過去の経験や余暇の活動について会話を維持でき、日常的な言語活動を支障なく行えるレベルに達している。相手による言葉の使い分け、意見の主張、社会的文化的に適切な言語行動も、部分的にできる留学生はかなりいる。しかしそれらがすべてそろってできる留学生はそれほど多くはない。判定者が複数であり、判定に厳密さを欠くため参考程度であるが、１０か月後の話し方の能力のレベルを未習者３８名、既習者４９名について分類してみると以下のようになる。

レベル	初級中	初級上	中級下	中級中	中級上	上級
未習者 (38)	3	2	9	16	6	3
既習者 (49)	0	4	11	18	2	14

6. 書き方（図１９）

テスト３の作文課題は日本滞在中の生活の感想や意見を交えて帰国に際してのお礼の手紙を書くというものである。平均レベルは、未習者、既習者それぞれ６.４１、６.７７であるが、最頻値は未習者が７、既習者が６である。標準偏差が未習者では、１.５３であるのに対して既習者は０.９３で、得点の散らばりが小さい。このことは得点分布図からも明らかである。来日後１０～１１ヶ月経過した時点で、未習者の場合も、３００～４００字程度の漢字を使用して即座に意見や感想を述べ、お礼の手紙をまとめることができるようになっている。表現の不自然さが少しみられるが、外国人の日本語に慣れていない普通の日本人にも理解できる内容である。上位の生徒の中には、日本人の高校生に劣らない文章を書く留学生もいる。

図１９



7. 滞在１１か月後の日本語能力

留学期間の最後の段階の留学生の日本語能力について、最も際だった特徴は聴解能力が高いということである。未習者も既習者も８割前後の生徒が１級の問題を聞き取っ

ている。聴解能力に比べて正答率は漢字、文法では３、２級で７割前後、読解能力は３級で７割前後、２級になると５割以下である。意識的な学習や指導が必要な技能については最終的な日本語能力にかなり個人差があることがわかる。

3.2　日本語能力の伸び

来日直後から、５か月後、および１０か月後に日本語の能力がどの程度伸びたか、その伸びが既習者と未習者では差がみられるかどうかについて考察する。

学習者の日本語能力の伸びを測定するためには、ある一定の期間をおいて同じ問題を使用したテストを行い、得点の変化をみるのが一般的なやり方である。しかし今回の被験者に関しては、冒頭に述べたような理由で、全く同じ内容のテストを実施することには、利点よりも問題点が多いと判断されたために、テスト１とテスト２、テスト２とテスト３の間に共通の問題を入れることによって、伸びを測定するという方法をとった。書き方と会話能力に関しては、前節において説明したように、評価基準に従って、評価した。

テスト１２ト３の共通問題の種類と数は次のとおりである。

表４　テスト間の共通問題

	リスニング		漢字		文法・読解	
テスト１	8		9		1	
テスト２	8	2	9	7	1	3
テスト３		2		7		3

表５は各項目についての全員、未習者群、既習者群の平均値、最大値、最小値、最頻値、中央値、および標準偏差である。図２０は各項目についてのテスト１とテスト２間の、図２１はテスト２とテスト３間の伸びを未習者と既習者に分けて示したものである。図２２　は書き方の得点をテスト１、２、３について、全員、未習者、既習者別に示したものである。

テスト１．２．３における得点の伸び

表５

テスト種類	学習歴	T1L5	T2L5	T1K4	T2K4	T1R4	T2R4	T2K3	T3K3	T2G3	T3G3	T2L3	T3L3
全	average	1.69	2.83	7.77	3.30	7.58	0.53	0.90	3.49	5.48	1.39	2.17	1.35	1.78
	max	6	7	8	9	9	1	1	7	7	3	3	2	2
	min	0	0	4	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0
	mode	0	3	8	0	9	0	1	6	7	1	3	2	2
	median	1	3	8	2	8	0	1	4	6	1	2	1	2
	SD	1.75	1.65	0.64	3.46	1.89	0.84	0.30	2.16	1.48	1.00	0.98	0.68	0.45
	count	92	92	92	92	92	92	92	69	69	69	69	69	69
未	average	0.03	2.05	7.71	1.13	7.21	0.08	0.84	2.87	5.55	1.19	2.00	1.16	1.74
	max	0.5	6	8	8	9	1	1	7	7	3	3	2	2
	min	0	0	5	0	2	0	0	0	2	0	0	0	1
	mode	0	2	8	0	9	0	1	2	7	0	3	1	2
	median	0	2	8	0	7.5	0	1	2	6	1	2	1	2
	SD	0.12	1.56	0.68	2.30	2.03	0.27	0.36	1.95	1.32	0.96	0.98	0.72	0.44
	count	38	38	38	38	38	38	38	31	31	31	31	31	31
既	average	2.84	3.37	7.82	4.83	7.83	0.85	0.94	4.00	5.42	1.55	2.32	1.50	1.82
	max	6	7	8	9	9	1	1	7	7	3	3	2	2
	min	0.7	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	mode	3	3	8	9	9	1	1	6	6	1	3	2	2
	median	3	3	8	6	9	1	1	5	6	1	3	2	2
	SD	1.40	1.48	0.61	3.33	1.74	0.95	0.23	2.19	1.60	0.99	0.95	0.60	0.45
	count	54	54	54	54	54	54	54	38	38	38	38	38	38

図２０

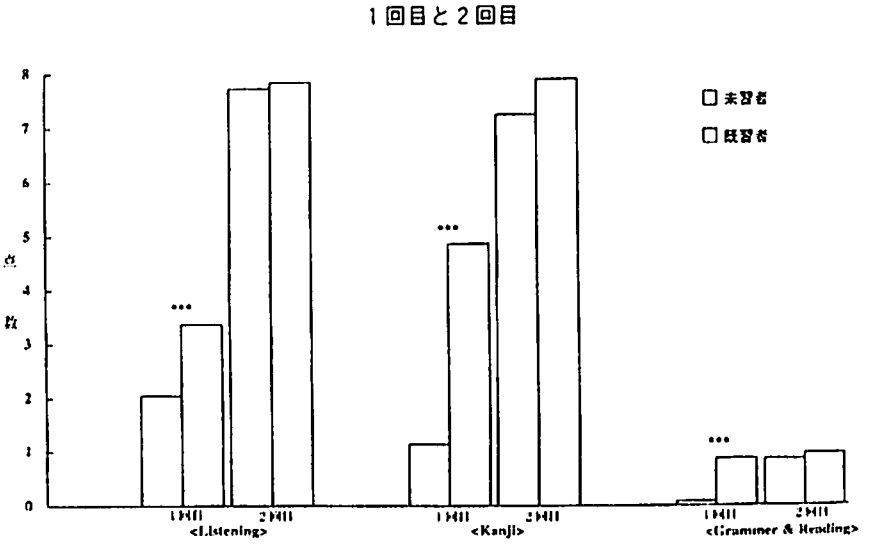
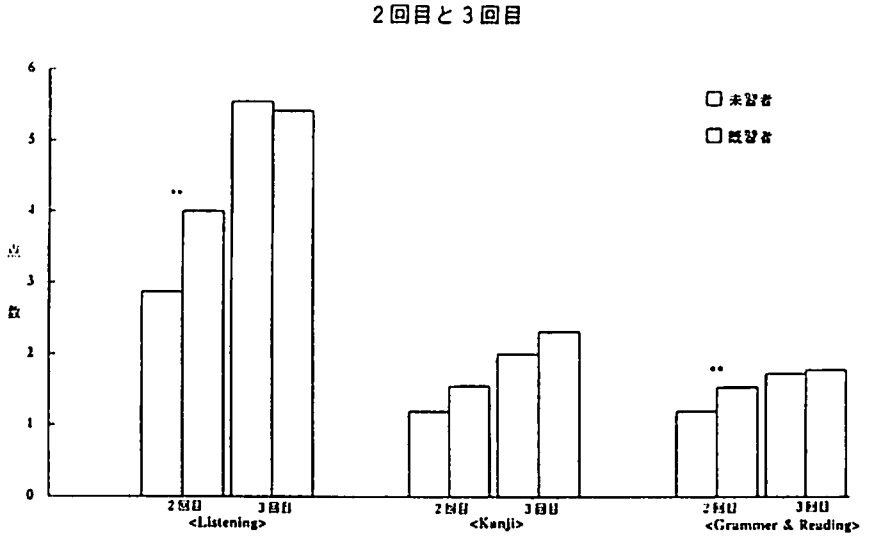


図２１



まずテスト１、２間の伸びについてみると、未習者の伸びはリスニング、漢字、文法・読解のすべての項目について、非常に大きく、２回目のテストでは、未習者既習者の間に顕著な差はない。Ｔ検定によると、未習者と既習者の間に有意な差が認められたのは１回目のテストの各項目についてのみである。２回目のテストにおいて、未習者と既習者に差が認められないのは、１回目との共通問題のレベルが低く（リスニングは５級、漢字と文法・読解は４級の問題である）テスト２の実施時点においては、未習者、既習者ともに４級の能力レベルに到達していた、あるいはそのレベルを越えていたことが、原因であろう。

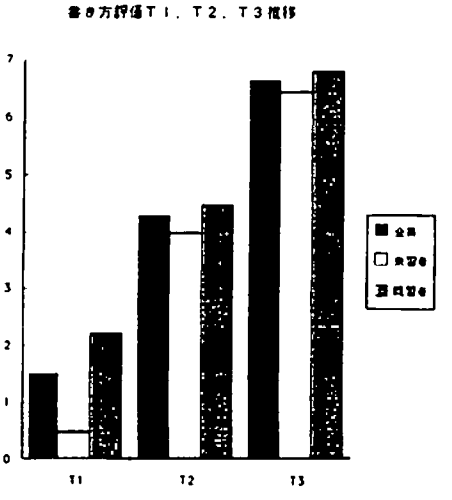
次にテスト２、３について見ると、その伸びの程度はテスト１、テスト２間ほどで

はなく、殊に既習者においては、伸びは大きくない。未習者と既習者の間に、有意な差が認められるのはテスト２のリスニングと文法・読解の項目であるが、その程度はテスト１ほどではない。このことによって、テスト２、テスト３間の共通問題は能力試験の３級の問題であり、未習者の日本語力が急速に上がったとはいえ、まだ既習者が先行していることがわかる。漢字については、３級の漢字であるにもかかわらずテスト２において、未習者と既習者の間に有意な差がみられないのは、既習者といえども来日時の漢字力はゼロもしくは非常に低く、最も高くて４級程度であったため、未習者がかなり早い時期に肩を並べることが可能になったものと思われる。

図２０と２１から、未習者においても、既習者においても、最初の５か月は、日本語能力の伸びが著しく、次の５か月は比較的おだやかであることがわかる。この傾向はことに未習者において際だっている。来日１０か月後では両者の差はほとんどなくなっているようだ。このことは、もちろん集団としてみた場合においてのみ言えることであって、個別の留学生についてみれば、テストで測定していない日本語能力の幅や厚みが既習者の一部の生徒は確かにみられるようだ。

次に書き方の評価を図２２によってみてみると、ここでも伸び方のパタンには同じような傾向がみられる。テスト１の時点では、未習者は日本の文字を知らない生徒が大多数を占めているために、５か月後の伸びはめざましく、テスト２、テスト３では未習者、既習者の差はわずかになる。この原因としては、他の能力に比べて、日本語で書くという能力は、漢字の習得が決め手となるため、かなりの忍耐と努力を必要とするため、いわゆる学習能力（学習の習慣）の個人差によって学習効果に差がでてくる。また指導の有無が形となって現れる技能でもあるために、未習者でも適切な指導が得られ、本人が意欲的であれば、かなり短い期間に上達することができるのであろう。しかし日常的には書くという行為はそれほど必要度が高くなく、機会も少ないので、意図的に指導が行われなければ、能力の伸びにつながらないと言えるだろう。

図２２



4. まとめ

4.1 留学生の日本語能力の到達度

テスト1、2、3における留学生の成績を日本語能力試験のレベルによって未習者と既習者に分けてみてみると次のようになる。能力試験では4、3、2級については60%が、1級では70%が合格ラインであるとされているので、ここでもそれを目安とする。

表6 来日時（テスト1）の日本語能力

	聴解	文法読解	漢字
未習者	4級以下	4級以下	4級以下
既習者	4級以下	4級以下	4級以下

表7 5か月後（テスト2）の日本語能力 ＊読解問題は問題数が少ないので参考程度

	聴解	文法	読解	漢字
未習者	3級	4級	(3級)	4級
既習者	3級	4級	(3級)	4級

表8 11か月後（テスト3）の日本語能力

	聴解	文法	読解	漢字
未習者	1級	2級	3級	2級
既習者	1級	2級	3級	2級

問題数が少ないので、上記の結果は無論日本語能力試験の模擬試験の役割を果たすものではない。限定された数の問題について見ることができる範囲での留学生の日本語の能力であることを断わっておかなければならない。来日時点では、平均値で見るかぎり、未習者はもとより既習者も、聴解、読解、漢字いずれの技能についても日本語能力試験の最も低いレベルである4級にはるかにおよばない。5ヶ月後には、未習者、既習者ともに聴解は3級、文法や漢字では4級に合格できるにレベル達している。11か月後には、聴解1級、文法と漢字は2級、読解は3級に合格できるレベルに達

している。聴解の能力が群を抜いている原因は高校留学生の生活環境にあると考えるのが自然である 。

日本語能力試験の聴解テストでは生活場面や文化的社会的な情報の聞き取りが重視されている[4] 。能力試験の出題傾向は日本の中で日本人と同じような生活をしている日本人と接触が多い受験者に有利であるということであろ。一方聴解に比べて文法の正確さが劣るのは、正式の日本語教育を受ける機会がある留学生が多くないことによると思われる。漢字学習の場合は、個人での学習が比較的容易であることに加えて、留学生の中には漢字に興味を持つ生徒が少なくないこともあり、予想されたほど習得状況が悪くはない。しかしこのような技能は聴解と異なり、勉強と努力が必要で生活の中から自然に習得できる技能ではない。

１２月に行われる日本語能力試験を受験する機会があるかどうかということも日本語能力の伸び方の一因となる。受験という動機づけによって、正確さにも目をむけるようになり、漢字や文法の学習が進むということがある。実際に試験という目標ができたことで、それまで日本語の学習に消極的だった留学生が９月に願書を出してから、日本語学習に対して意欲的にとりくむようになったという報告が受け入れ校の担当者からよせられている。

4.2.　日本語能力の伸び

滞在５か月までの日本語の能力の伸びは際だっており、ことに未習者に顕著である。１１か月後の伸びは比較的ゆるやかである。技能別にみると、漢字の能力については５か月後に未習者と既習者の間に統計的に有意な差が見られなくなる。リスニング、文法、読解においては５か月後にもわずかだが差が有意である。しかし１1か月後には差はほとんど見られない。

4.3　結論と今後の課題

留学生の日本語能力の伸びについて従来経験的に言われていた夏休みを境とする上達が今回の調査においても夏休みまでがひとつの山であることが裏付けられた。夏休み開始時点ではほとんどの生徒が日本語能力テスト４級のレベルに達している。帰国時には既習者の成績上位者は日本語能力テスト３級から２級合格レベル、未習者は３級レベルに達している。ことに聴解力の伸びが大きいことがわかった。

高校留学生の日本語学習は、スタート時点では母国での学習経験の影響が大きいが、５か月後には未習者が漢字力において追い付くようだ。またその他の技能でも差が少なくなり１１か月後には差はほとんどなくなっている。

この結果から夏休みまでの日本語学習が重要であることがわかる。今後は来日時点から夏休みまでの学習をいかに有効に行っていくかを考えていかなければならない。

今回の日本語能力の縦断的な調査は、高校留学生については始めての試みであったが、2.3において指摘したようにいくつかの問題点をもっている。まず、広範囲な能力

について測定しようとしたために、時間的制約があり、個々の技能について必ずしも十分に測定することができなかった。今後は個々の技能についてさらに綿密なデータを蓄積していく必要がある。また会話と書き方はACTFLの基準を参考にして評価したが、もとよりACTFLの評価基準はアメリカの大学で日本語を学習している学習者を対象に開発されたものであり、日本国内の学習者にそのまま適応することには問題があることが指摘されている。[5] 今回得られた結果を基に、日本で日本語を学習する日本語学習者の現状と必要性にそった評価の基準の構築の必要がある。

今回の調査はさまざまな制約のために、上記の問題点をもっている。しかしそのことがこの研究の意義を消してしまうものではない。今回得られた結果を手掛かりとして、日本における高校留学生の日本語学習についてさまざまな角度からの研究を行っていきたい。

謝辞

この調査にあたっては民間国際交流団体の関係者のかたがたと留学生のみなさんに協力していただきました。ここに記して感謝の気持ちを表したいと思います。また調査結果の統計的な処理については、高尾明子さんに協力していただきました。感謝します。

なおこの原稿は1996年6月22日に国際基督教大学で行なわれた小出記念日本語教育研究会において発表したものに加筆、訂正を加えたものです。当日は貴重なコメントや温かい励ましの言葉をいただきました。記して感謝いたします。

脚注

1) ここで扱う高校留学生とは国際理解と他文化理解を目的として約一年間にわたって、日本のボランティア家庭に滞在し、高校に通う１４歳から１９歳の、海外からの高校生のことである。

2) 日本語能力試験の問題を中心にしたのは留学生の日本語力を客観的な尺度によって判定することに意義があると考えたからである。

3) ６カ月未満を未習者賭した根拠は４名の該当者が教室を中心とした体系的な日本語指導を受けていないこと、来日が決まってから、応急処置的な日本語学習が中心だったことによる。

4) 日本語能力試験出題基準による

5) 日本におけるACTFLのOPIテストを実施しているテスター間の共通の認識のようである。